

派遣者番号	R6K20	氏 名	宮戸 和哉
研究主題 —副主題—	児童会活動における児童の意識と主体性の関係 —児童質問紙調査を通して—		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	山田 雅彦
所属	武蔵野市立境南小学校	所属長	杉谷 努

キーワード： 主体性 児童会活動 環境づくり

要旨：本研究の目的は、児童の主体性を高めるために児童会活動の仕組みの変更を行なった学校において、児童の委員会選択や活動への意識と主体性の関係を児童への質問紙調査によって明らかにすることである。この目的の背景には、近年主体性に関する実践が多くされているが、解釈の差や環境づくり等の課題がある。そこで、児童会活動の仕組みの変更を行なった学校を事例に、第5・6学年の児童への質問紙調査によって児童の意識の分類や主体性の関係の調査を行なった。その結果、児童の委員会選択理由とやりがいや楽しさを感じる活動の分類やその割合が分かった。またそれらの分類と主体性因子との比較を行い、有意な差がある分類が明らかになった。今後は、この結果を学校教育で求められる主体性を正確に捉えて効果的な環境づくりや、慣例的に行われている教育活動の仕組みを見直すことに生かしていく。

児童会活動における児童の意識と主体性の関係 —児童質問紙調査を通して—

宮戸 和哉

1. 研究の目的と背景

本研究の目的は、児童の主体性を高めるために児童会活動の仕組みの変更を行なった学校において、児童の委員会選択や活動への意識と主体性の関係を児童への質問紙調査によって明らかにすることである。

この課題設定は以下のような問題意識に基づいている。

平成 29 年度告示の小学校学習指導要領では、資質・能力の育成や主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が示された。それに伴い、主体性に関する校内研究等も盛んに行われているが、教員間での理解の差や成果を数値化することの難しさ等の課題も多い。平野（1994）は、「主体性というのは、子供に新たにつけていくものではない。子どもはすでにそれなりに主体的に行動しているのであって、その主体性が発揮できる場（環境）に置かれ、主体的に行動していく過程で、その主体性が洗練され、強化され、向上していくのである。（p55）」と述べている。この視点で現代の学校という環境を見直すと、学校は主体性が発揮できる場を整えられているかという課題意識をもった。今までの学校が慣例的に行なっていた活動の仕組みを変えた学校を事例として、そこでの児童の意識と主体性の関係を調査することを通して、主体性についての理解や主体性を高めるための要素を考察していく。

この研究の理論的な背景として、主体性という言葉の捉えについて、哲学や教育心理、教育学等の解釈を調べた。また、本事例で扱う学校が行なった児童会活動の仕組みの変更点と学習指導要領の目指す児童会活動の目的との関係を調べた。

2. 研究の方法

対象の学校の第 5・6 学年の児童に質問紙調査を行い、その分析と考察を行う。

対象となる学校は、前年度に児童会活動が受け身で常時活動に終始してしまうという課題を解決するために、以下の 2 点の仕組みを変更した学校である。

- ① 委員会選択の際の人数制限を撤廃し、児童の希望の委員会に所属できるようにする。
- ② 委員会活動の活動内容について全校アンケートを基に代表委員会で活動を振り分け、各委員会で必要な活動を設定し活動できるようにする。

質問紙の内容は、浅海（1999）の主体性尺度の三つの因子を参考に、一部を変更して 4 件法による設問を作成した。また、仕組みの変更点について、選択理由とやりがいや楽しさを感じる活動についての記述式の設問を作成した。

質問紙調査の実施の時期は、児童会活動が十分に行われた 2024 年 11 月に実施した。その結果 169 名の回答を得た。（回収率 82.8%）

3. 研究の成果

3.1 因子の抽出

回答の因子分析を行なった結果、本研究で扱う主体性の因子は二つとして考えることが妥当であると分かった。そこで本研究で扱う主体性の因子は「積極的言動因子」と「自己決定因子」の二つとした。

3.2 選択理由とやりがいや楽しさを感じた活動についての分類

質問紙の記述の二つの項目についての分類を行なった。その結果は以下のとおりである。

表 1 選択理由の分類

分類	記述例	人数	割合
貢献	集会で学校のみんなの関わりを増やせたらいいなと思ったから	69	34.1
内容	本が好きだったから	39	19.3
活動	動物の世話をしてみたいから	26	12.9
成長	学校の生徒に本の魅力を伝えるだけでなく、自分も本を好きになろう、と思ったからです	23	11.4
同じ	去年も同じ委員会に入っていて、楽しかったからこの委員会に入ろうと思いました	21	10.4
感情	放送が楽しそうだから	17	8.4
その他	なんとなく	7	3.5

表 2 やりがいや楽しさを感じる活動の分類

分類	記述例	人数	割合
成果	自分たちが企画した遊びでみんなが盛り上がっているとき	59	31.1
話し合い	みんなで一つのことを決めてみんなの意志が一つになったとき	26	14
作業過程	計画を立てたり友達とじっくり考えたりしているとき	25	13.5
常時活動	花の水やりや花の植え替えをするのが楽しいです	25	13.5
達成	しおりが完成したとき	22	11.8
その他	感じた	18	9.6
ない	あるときは、あるがあまりない	11	5.9

3.3 各分類と主体性因子の関係

選択理由とやりがいや楽しさを感じる活動のそれぞれの分類と積極的言動因子、自己決定因子との関係を調べるために、一元配置の分散分析による多重比較を行なった。その結果、各分類と自己決定因子の間にはどれも有意な差は見られなかった。積極的言動因子と選択理由では、「成長」や「貢献」と「その他」の間に有意な差が見られた。また、積極的言動因子とやりがいや楽しさを感じる活動では「ない」以外のすべての項目と「ない」との間、「話し合い」と「常時活動」の間に有意な差が見られた。

このことから、選択理由が曖昧な児童よりも成長や貢献などの理由を感じている児童の方が、積極的言動因子が高いことや、常時活動よりも話し合い活動にやりがいや楽しさを感じている児童の方が、積極的言動因子が高いことが分かった。

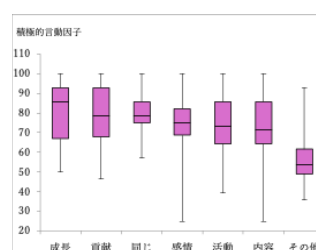


図 1 選択理由と積極的言動因子

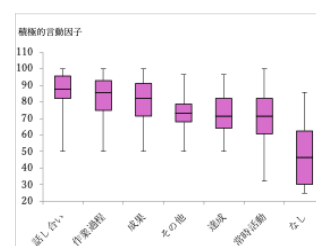


図 2 やりがいや楽しさを感じる活動と積極的言動因子

4. まとめと課題

本研究の成果の 1 点目は、人数制限のない委員会選択や活動内容を作り上げていくことのできる環境での児童の委員会選択や、やりがいや楽しさを感じる活動の分類が分かったことである。2 点目は、積極的言動因子と選択理由や、やりがいや楽しさを感じる活動の分類において、有意な差が出る分類が分かったことである。

課題としては、学校における主体性を再考し、その要素を明らかにすることや、その尺度や本研究で得た分類の要素を設問にした質問紙調査を再度行い、相関関係を明らかにすることである。

5. 成果の活用法

本研究の成果を今後、求める主体性を正確に捉えて効果的な手だてを考えていくことや、慣例的に行われている教育活動の仕組みを見直すことに活用していく。

6. 参考文献

- ・浅海健一郎 (1999) . 「子どもの『主体性尺度』作成の試み」『人間性心理学研究』第 17 巻, 2 号, pp, 154-163.
- ・小林敏明 (2010) 『〈主体〉のゆくえ-日本近代思想史への一視角-』講談社。

- ・平野朝久（1994）．『はじめに子どもありき-教育実践の基本』．学芸図書株式会社． p55
- ・山田雅彦（2004）．「授業を「鵜呑み」にする主体性-ゴードンの studenting 概念を手がかりとして-」『東京学芸大学紀要 第一部門 教育科学』第 55 集 p9-17